

卷頭言

柳田国男は、昭和四年六月の『人類学雑誌』で「会員としての我々の経験から言ふと、学会が栄えるといふことは、必ずしも精透な研究を以て、後代の目標を打立てる迄の重要な論文が、連続して出現することを意味しては居なかつたやうである。理想は固よりそこに在るべきであるが、それには時期もあり又外部の機会を伴なはなければならぬ。今少し卑近なる要件は、会員が単なる読者となり又は普通の予約者となつてしまはぬことで、共同の興味が或一隅に傾注せず、寧ろ幾分か雑駁で且つやや移り気に見える位に、毎月の題目が変化して行くやうな際が、実は次の進出を孕んだ最も活気ある時代なのである。求めて此状態を招致することも決して会報の堕落といふことは出来ない。現にこの会でも過去に幾度となく、さういふ傾向を呈したことがあり、今から回顧するとその頃の方が会員らしい会員が多かつた。」と、述べられている。『日本の石仏』誌が、会員の機関誌として生まれて、間もなく七年になろうとしている。総会の折に、あるいは手紙でいろいろと会誌について会員の意見も述べられているが、この辺で今までの総目次でもつくつて、これから会誌のあり方について考えてみたいものである。

『日本の石仏』が、いくら同人誌的なものではいえ、会員の機関誌であるのみならず、全国の一流書店の店頭にも並び、他の学会や図書館などの団体の様に会員にはなりにくいところでも、毎号『日本の石仏』を求めておられる。このことを思うとき、ある程度他の学会の人々にも参考になるような論考が望まれるのである。

今日のように細分化されすぎた学問からは、それぞれの学問の接点について、いろいろな立場からの論考が望まれる。石仏研究においても然りである。が、どうもこれを満たすような論考が集まつてこない。会誌ではあるが、ある程度店頭に出すからには、もう少し幅の広いものにしたいものである。そうかといつて総合雑誌ではないので、あまり石仏研究に縁遠いものは困るが、これを購読される方は、遠慮なく投稿をお願いしたい。ただ、何分にも印刷実費を捻出するのにぎりぎりの現状については、幾分なりとも原稿料をお払いしく思いつつも、それがかなわぬことだけは了承していただきたい。生まれてまだ七年未満の会だけに、将来のために一臂の力を貸してやろうという奇特の士に期待するところ大なるものがある。

それとともに、この辺では非お願いしたいのは、幅広い会員層の投稿である。幸いに今のところ必要量の原稿は集まつてはいるが、毎号多彩にして変化に富んだものにするためには、もっと多くの原稿が必要であり、先着順でなくして、二年以内にはどれもが掲載できるような態勢を整えたいと考えている。編集委員一同そのような配慮はしていくよう、気を使っているので、その間の調整についても、大乘的立場からご理解願いたいところである。

わずか百ページ前後の冊子で、年四回発行では、じっくり腰を据えてよい論考をものしている方々には何とも不満である。国書刊行会におかれでは、来春あたりから石仏の選書というような、あまり枠にはまらない自由な論考を単行本として出版していくこうという計画を立てておられるので、長いこくのあるものは、そのためにご用意していただくとよいと思う。『日本石仏』にも、今年度から連載物を実施しているが、全部連載の終つたところでその選書に組み入れてもらうものでてくるであろう。また二〜三回ぐらい連載したところで、読者の反響をみながら、そちらに廻してゆくものもあるかと思う。連載を終つてから単行本にするのが常道であろうが、これならいけると見通しのついたものは、どんどん単行本化していくのもう一つの方法かと思う。

卷頭言

近年、石仏への社会的関心が高まってきたのは、近世以降の庶民に親しみ深い、どこにでも存在する民間信仰の上に立った石仏への関心が口火をきつたことは明らかである。関西よりも関東での関心がより深いことは、関東においてより多くの多彩な民間信仰の石仏の造立がみられたことに起因しよう。その理由を明らかにすることは、石仏というものがどのような条件のもとに発生したかを明らかにする大事な課題であるが、この問題に真正面から取り組もうとする人の少ないことは、石仏研究上の大きな手落ちであると思われてならない。

貴族や土豪が経済力にものをいわせて、先祖供養のために、また後世の安樂を期して石仏造立にあたつたることは容易に想像できるが、近世以降の一般庶民がなげなしの財布の底をはたいて、あるいは志を同じくする人々が結集して造立するようになったのは、ある程度造立できる条件がそろい、上層階級の人々にならって始めたこともあるが、そこには庶民の庶民なりの意図があつたろうことも考えねばならないであろう。

京畿を中心とする先進地方には、近世以降も、古代末から中世にかけての仏説中心の石仏が相変わらず造立され、とりわけ阿弥陀と地蔵が主流になっている。関東をはじめとする僻遠の地方にももちろん仏説に基づいた石仏の造立はみられているにしても、今までほとんど先進地方で造立のみられなかつた多彩な民間信仰の石仏が、近世以降突如としてしかも急激に繚乱のうちに現れる。この疑惑は、埼玉県以外の会員にもかなりあつたのである。この特集の原稿の集まりのあまりにも少ない理由も、一つにはそこにあつたと考えられる。

古代・中世における東国が、過疎の地であり、経済力においても劣っていたとは考えられない。いわんや、東国人に信仰心が乏しかつたとは考えられようはずもない。しいていえば新興の鎌倉仏教が、特に西国的石仏造立に力を入れることをしなかつたということはいえるかもしれないが、それにはそれなりの証拠が必要であろう。また板碑自体が、中世の石仏の大半の役割を果たしたとも考えられくなはないが、それを肯定するにはそれだけの納得できる説明がなければなるまい。

古代から中世にかけての石仏の大半は、すでに先学によつてかなりなまでに調査がなされ、報告もされている。東国の数少ない石仏についてもこのことはあつてはまる。それでもむかわらず、会員の過半数を関東に持つ日本石仏協会があえて「中世の石仏特集」を意図した意味は、新発見や在来の中世の石仏の再検討もさることながら、以上のような問題を改めて俎上にのせて、お互に考えてみたかったからにはほかならない。この問題は短兵急に明らかにされうるものでないことはもちろんであるが、やはり時にはみんなで考えてみる機会が必要であろう。

近世以降東国や僻遠の地に、急激に多彩な石仏が、しかも数多く造立され、現在の大半の石仏研究家の関心の対象になつてゐる石仏発生の因、それを培つてきたであろう中世の土壤も、これによつて明らかになるであろう。(大護記)

卷頭言

石神をふくめて石仏研究の道は、古代から今日まで各地に造立された数多くの、文字塔を含めての造像を研究することにある。それにはまずどこにどのような石仏・石神があるかという所在調査が先行する。幸いなことに、中世以前のものについては、長い間にわたる先学の調査・研究によつて、かなりなまでに明らかにされ、深い研究の堆積もある。ところが、近世以降となると調査研究の日が浅く、その所在すらも明らかでない地方が少なくない。その中にあって、近年次第に各地の同好の士の数は増えつつあり、また市町村史編さん委員会や教育委員会の手によって、次々と多くの調査研究の成果が刊行されつつある。これらは、まことに喜ぶべきことである。

隣接の民俗学の分野においては、石仏よりも調査研究の歴史はやや古く、今日の盛況を見るまでには多くの実態調査が不斷に続けられてきた。それらの調査報告書は「民俗誌」という言葉でもって呼ばれている。しかしながら、今日、中央は勿論、各地の民俗学の会の機関誌は、「民俗誌」の枠をこえて、各分野ごとの共通の課題が確立されつつあり、それに向かつてさまざまの論がかなりなまで展開されている。「民俗誌」的記事はなお見られるが、論を展開しないまでも、それらの志向するところは大半が共通の課題に向けられているよう思う。

これに対して石仏関係は、共通の課題を志向するよりも、各人の関心のおもむくままの調査報告的なものがなお主流をなし

ている。このことは、調査研究の歴史が浅いために、当然の成り行きとも言えよう、また今日その必要性が高いことも明らかである。仮にこれを「石仏誌」と名づけた場合、その意義と必要性は十分に認めながらも、そろそろ論考的なものがそれに劣らず顔を出しはじめてよい頃ではないかと思われる。石仏誌的な記述であつても、その調査の目的、志向するところを会員相互が共有していきたいものである。

たとえば道祖神に例をとれば、ある地区的独自な様式、信仰、祭式が調査され報告される場合、何故その地区にそうしたものが出現したのか、それは周知の道祖神一般に対してもどうな位置づけがなされるものか、また何故にそこにそのようなものが出現したのか、石工の問題、その様式の際限、他の民間信仰との関係等等の問題意識がその調査報告の底流にあつてほしいものである。そういう問題意識を持つての調査では、調査の過程にもおのずから相違があるはずである。そういうた考察は、まず分布調査を終えてからという考え方もあるが、近辺の人々からの聴き取り調査も、問題意識を持って平行してなされるべきものであろう。

問題意識、まして共通の問題意識となると、現状ではなおとらえにくい点もある。しかし、石仏を調査して歩くからには、人それぞれの問題意識があるはずである。たとえ「私は石仏を写真に収めるのが目的である」という人でも、問題意識の上に立つて石仏を眺め、シャッターを切ると、無作為に撮るのでは、出来上がりに差があるものである。石仏の美しさに魅せられたとしても、どこにその人が魅せられたかは、ちゃんと作品に出るはずである。

こうしたことから、どんな小論、あるいは調査報告書であつても、ただありのままの報告にとどまらず、そこに調査者の考えをはさんで欲しいものである。「流は万流」といわれる。その考えがほの見えれば同調もあろうし、異なった視点を述べることも可能であり、そこに会員相互の意見の交流もなされる。こうして多くの会員が有機的につながることができるとき、協会といふものの機能が充足され、発展の基盤が築かれていくであろう。

卷頭言

石仏調査旅行の定期的な主催は、日本石仏協会が創立以来実施してきた重要な事業のひとつであったが、数々の話題と実績を残して、昨年度の三十九回を最後に終結することとなつた。この事業が、もし協会への財政的な寄与という観点で評価されるとするならば、けつして成功だったとはいえないだろう。当初から、調査旅行は講師や関係役員に、多大の経済的あるいは精神的な負担と犠牲を強いる形で運営されてきたにもかかわらず、つねに収支の不均衡に悩まされつづけたからである。

しかし全国の石仏研究者や愛好者に、気軽な相互の研究、連絡、提携の場を提供しようとする本協会の使命からすれば、この事業は、大きな成果をおさめたといえる。東西南北の各地で、それぞれ孤立して活動し、お互に面識のなかった愛好者同士が、親しく膝を交えて語り合える調査旅行は、つねに期待に満ちたすばらしい邂逅の場であつたし、こうした交流は、石仏についての見方、考え方について、参加者相互に啓発しあい、またその後の連携や友情を深める端緒にもなつた。終結にさいしては、七年間にわたってこの事業を支えて下さった参加者各位に、そして献身的な奉仕でもつて協会の過重な期待に応えていただいた講師や担当役員の方々に、厚く御礼申し上げなくてはならない。

もちろんこれで協会が、石仏調査旅行と、まったく無縁になつたわけではない。従来も不定期に実施してきた海外への調査旅行は、次回は中国をめざす予定で、担当役員による企画、立案の作業が進行中である。また今年度の理事会で討議された編

集委員会への宿題もある。これは機関誌である『日本の石仏』誌の機能のひとつである会員への情報提供の機能の中で、石仏旅行に関する部分を強化、拡充しようとする試みである。これまで協会を中心に培われてきた会員の連帯感と相互交流の実績のなかで、すでにいくつかの地域的な研究サークルや、私的な旅行グループが誕生しているし、これからもこのようなサークル活動が、同好者のなかで一層広く深く展開して行くことを期待してやまないのであるが、本号（30号）より新設された「はがき通信」欄は、こうしたサークルやグループ、あるいは会員個人の活動に対し、連絡や呼びかけの場を提供しようとすることである。旅行へのお誘いだけでなく、各種の情報や写真の交換、文献、書類の貸し借りなど、気軽に御利用いただきたい。

石仏探訪の旅は、かららずもグループで、大勢で出かけるだけがすべてではない。むしろ思索を伴うひとり歩きのなかで、石仏との静かな対面のひとときを持つことこそ、石仏調査旅行の本当の醍醐味といえるかもしれない。本号からリレー形式で連載する「石仏の旅」は、グループ旅行だけでなく、未知なる石仏との対面を求めてやまない会員ひとりひとりに、好適な伴侣となるはずである。毎号全国各地に一日ないし一泊二日程度で巡れる石仏探訪のコースを設定し、正確な地図を添えて、コースの魅力を紹介する。リレー連載のスタート当初は、数人の依頼原稿によつて執筆のフォームを模索することになるが、その後は全国の会員ひとりひとりが推奨のコースを設定して、積極的に投稿いただけるものと期待している。

いっぽう石仏の魅力の探求は、ただ遠くへ旅し、未知なる石仏との対面を追い求めるだけでは、達成できないこともある。その石仏を生み出した地理的なあるいは精神的な風土を、自己の生活空間として共有することによって、その魅力を初めて感受し理解しうる場合も少なくないはずである。地域社会に対する啓発の作業、地域社会のなかで石仏への理解や認識を高めるための努力を積み重ねている会員は多い。本号には間に合わなかつたが、次号以降これもリレー連載の形式でスタートする予定の「郷土と石仏（仮題）」では、こうした地域社会と石仏との不可分のかかわりに焦点を当ててみたい。

（松村雄介）

卷頭言

近年全国各地の地方自治体ごとに、競うように行われているものに『県史』をはじめ『市・区・町・村史』などの編纂がある。「通史編」と「資(史)料編」に区分するなど、それぞれの地域に応じた編纂の方法がとられ、一冊だけの『村史』から数巻の『市史』や『区史』、中には数十巻に及ぶ『県史』が相次いで刊行されており、多年にわたる調査の成果がまとめられている。

振り返ってみると、日露戦争後の明治末年から大正を経て昭和の初めにかけても、全国各地で『郡誌』や『市史』の編纂が一種の流行のように行われたことがあり、奇しくも大きな戦争が終わった後に同じような現象が生じたのには、それなりの理由があつてのことには違ないが、ここではそれについて論ずるつもりはない。

ただ前回と今回のものを比較して言えることは、戦前の郷土史と戦後の方郷土史といつた言葉の違いから受ける印象に共通する歴史観の相違が、至極当然のことながら両者の編纂の基本方針と内容を特徴づけていることである。すなわち、戦前までの郷土史観の主流が忠君愛国を基本とした国家主義の見地から郷土の過去を眺め、その中で輩出した志士や偉人と称せられる人の事績や郷土の果たした役割を誇るものであったのを、前回はそのまま採り入れて郷土を謳歌する傾向であったのに対し、今回は、庶民には歴史がないなどといわれて、それまで返り見られることがなかつた地域社会における庶民生活の変遷に視点を据えて、これを掘り起こそうとするものに変わってきていているのである。これは従来の中央権力に主眼をおいた歴史に対する地

方の歴史ということで、地方史と称されるわけであるが、特定の地域を対象としているという意味で、ここではあえて地域史と呼ぶことにする。

ところで、前回の郷土史観に基づく『郡誌』や『市・町・村史』の編纂が盛んに行われていた大正の初期に、村に生活する庶民にも歴史があり、子孫のために役立つ郷土史(誌)を編纂すべきであることを、「郷土誌編纂者の用意」「郷土の年代記と英雄」など、後年『郷土誌論』にまとめた諸論文を発表して熱心に説いたのは、わが国民俗学の創始者柳田國男であった。民俗学の発想が文字にも書かれない常民生活の変遷に視点がおかれていたから、当時の郷土史観とは相容れぬものであつたわけで、戦後の歴史観に一步先んじた考え方であつたのである。したがつて現代の歴史学が民俗学を抜きにしては語れなくなつてゐるものこのためである。

ことに地域史とも称すべき現代の『県・市・町・村史』にとつて民俗学の分野は必要欠くべからざる要素であり、いずれも資料編の一つとして「民俗編」が編纂されるようになつてゐる。中でも庶民の精神生活として重要な位置を占める「民間信仰」または「民俗宗教」の分野の調査結果がかなりの紙幅を費やしており、これにはその地の石神・石仏も石造文化財として加えられている。つまり、明治維新以来淫祠邪教の類として顧られなかつたものが、民間信仰の文化財として重要視されるようになり、中でも代表的な碑石は県宝をはじめ市町村の文化財に指定されて、特別な保存法も講ぜられている。

これには早くから石神・石仏に着目した一部民俗学者の功績もあるが、地道な調査研究を重ねてきた石神・石仏研究者の功績のほうが遙かに大きいと自負して差し支えないと思う。実際問題として、全国各地に現存する石像・石碑の実態が、これほどまでに明らかになつたのも、当協会の会員をはじめ多くの石仏を愛好する人びとがいたからこそ、可能だつたことも事実である。

そこで今後の課題としては、この膨大な資料を庶民の精神史を解き明かすために、どのように生かしていくかということである。これが石仏研究を學問として確立させる方法にもつながる一つの道であると思う。

卷頭言

本誌も32号となり、来年の一月から九年目を迎えることとなる。

当初、発起人会において、日本石仏協会をどのような会として、性格づけるかについて論議を重ねたが、九年前は石仏への志向も今以上にまちまちであり、方向づけは困難であった。しかし、一つの団体として活動していくからには概ねの志向がなくてはならないことは明らかであり、単なる鳥合の衆であつてはならないということは、誰しもの共通の認識であった。

当時は在来の石造美術的視点がなお主流であったが、東京に根拠を置くからは、日本の東と西では石仏 자체のあり方も大きく差異があり、また京都には川勝先生の『史迹と美術』の会もあることから、歴史民俗学的視点に重点を置くのがよろしかうという見解が支配的であった。それはまた、当時澎湃として盛り上がっていった新しい石仏への関心の主流でもあった。しかししながら、全国組織として最低一千人の会員を目指とするからには、さらに包括的なものであることが必要であり、またはじめて石仏への関心を持たれた人々には、もっとやさしく楽しいこと、文学のあるいは抒情的な香りを加味することが要望されもした。いわば極めて多彩な『日本の石仏』誌として発足したわけである。そうして五年、十年経つうちに、おのずからある方向づけがなされるであろうと考えてきた。その間、折りに触れ事に当たつて、「卷頭言」において会の主張的なことを掲げ、あまり逸脱しそうことのないよう配慮は持ち続けた。

八年経った今日、振り返ってみると、『日本の石仏』誌は一応の性格づけはなされたように考えられる。ただ当初の、やや欲ばつた目的が、啓蒙的に過ぎて得るところがすくないという批判もあり、逆にアカデミックに過ぎてとりつきにくいう見解も出ている。これは発足当初の発起人の見解が当然招くべき結果であり、いずれの考えも、今更急に方向転換を不可能にしているのが現状である。当初一千人近くあつた会員が、正直なところ六百人前後になつており、このままだと季刊として現在の体裁を維持することが困難になりつつある。そこで、当然会費値上げが考えられるが、その結果が会員減につながることも予想されるので、先般の常任理事会において長時間論議の末、向こう二年間は会費値上げを保留して、その分を役員並びに会員有志から維持費の醸金にまつこととした。二年後には協会編集の『石仏図典』の収益もあり、その頃には新しい風も吹こうというものである。それとともに基本的問題は、会員増加であり、これについての会員のご努力に特に期待するものである。

よく「十年ひとむかし」といわれるが、あと二年で十年になる。六十二年からは会員の衆知をあつめて、新しい発展を期したいものである。そのためには「会員の広場」欄に進んでご意見を寄せられるか、最寄りの理事をお話をいただきたく思つて。特に来年一月十九日(土)、二十日(日)の神奈川県大山阿夫利神社においての総会には、一人でも多くのご出席を得て、活発な論議を切望する次第である。

なお「卷頭言」は、今までで一応の役割は果たしたと思われる所以、新年度以降はしばらく休載し、その分を「会員の広場」欄に充てることとなつた。

(大護記)